

『資本論』形成史研究の旅

——一九八六年度専修大学在外研究報告——

内 田 弘

すでに本研究所のグループ研究(『資本論』と現代資本主義)で標題の報告を行なっているので、以下ではそのうち、『資本論』形成史研究者の間で論争されている問題に限定して、報告する。

1 『マルクス主義研究所』[Institut für Marxistische Studien und Forschungen (IMSF), Frankfurt / Main] における討論

一九八六年九月八日午後、ハイデルベルグからフランクフルト・アム・マインに着き、駅から電話で連絡すると、まもなくヴィンフリート・シュヴァルツ氏(Dr. Winfried Schwarz)は迎えにきてくれた。一八〇cmを越す長身、がっしりした体格で、眼は大きいが暖か味のある光りをたたえている。差し出された手を握ると力強く大きい。

『マルクス主義研究——マルクス主義研究所年報 (Marxistische Studien. Jahrbuch des IMSF)』で知られている同研究所はフランクフルト・アム・マインの中心部よりやや離れた閑静なオフィス街にある。「I 資本主義理論と経済分析」・「II 科学技術的發展と社会的結果」・「III マルクス主義的平和研究」・「IV 再生産の諸条件と労働者の状態」・「V 社会運動と労働組合理論」・「VI 労働者の生活様式と意識」の六つのプロジェクトー

ムが編成されている。研究員は所長のハイツイオン博士を含み一〇人である。シュヴァルツ氏は第VIチームの中の「マルクス・エンゲルス研究」の責任者である。同研究所は『マルクス主義研究』のほか、『社会運動——マルクス主義研究の分析と記録』や『経済発展と労働者の状態に関する情報』などの刊行や各種の会議・セミナーを開催している。

シュヴァルツ氏の研究室にはイタリアから留学しているアレサンドロ・マツォーネ教授 (Prof. Alessandro Mazzone) が同居していた。マツォーネ氏とは翌日会う約束をして、さっそくシュヴァルツ氏と討論に入った。

討論は、シュヴァルツ氏の「Die Strukturgeschichte des Marxischen Hauptwerkes——Von "Rohentwurf" zum "Kapital"」(時永・大山訳『資本論体系成立史』)をもとに、私が離日まえに送っておいた英文レジュメ、The Double Problem of Constant Capital in the Formation of Marx's "Capital" (本稿の後半に訳出)と、筆者がケルン滞在中送ってくれた、それになりたいするシュヴァルツ氏の返書とをもとに始められた。

論点は、時間の制約のため、『資本論』形成史研究のなかで、いわば「スフィンクスの文庫」ともいふべき「第六章 直接的生産過程の諸結果」という『資本論』の第三番目の原稿(一八六三～六五年成稿)の第一部の最後に属するものに限定された。

第一の論点は、「諸結果」で示された問題はすでに『経済学批判要綱』にあると私の主張にたいする、シュヴァルツ氏の疑問にあった。「新メガ」の『要綱』編集者が「剰余価値と利潤」とタイトルをつけている箇所、および「再生産と資本の蓄積」というタイトルをつけている箇所の或る部分 (MEGA, II/1, S. 277—309, S. 336—345) には、たとえば、のちの「諸結果」で再び議論される剰余価値と利潤との関係や、ブルードンの誤った主張、すなわち労働者は賃銀で生活手段を買い戻せない、なぜなら利潤は販売過程で発生するという主張にたいする

マルクスの批判がすでに行なわれている。ブルードン批判の個所を、傍らにあるメガの該当個所 (ibid., S. 336ff) を開いて示した。するとシュヴァルツ氏はしばらく「諸結果」と『要綱』のその個所を読んでいたが、やがて、内田の主張は正しいと率直に認めた。

第二の論点は、私のいう「二重の不変資本問題」と『要綱』における多くの諸資本の間の「競争」との関連である。この論点は私が上記のレジュメでつぎのように主張したことにかわる。すなわち、『要綱』では基本的にマルクスは資本の一般の本質を展開するために「一つの資本」を前提し、資本間の競争を捨象した。この前提は資本間の競争に規定された機械投資の動機と結果を研究するという課題と矛盾する。しかも『要綱』ではマルクスはスミスにならって、「一つの資本」は生活手段のみを生産すると想定しているが、「一つの資本」は生産手段、特に機械をいかにして調達するのかという問題をほらむ。しかしマルクスはこの矛盾を事実上解いている。すなわち『要綱』で相対的剰余価値の概念を展開し (MEGA, II/1, SS. 248—266)、労働の二重作用を明らかにした (ibid., SS. 266—277) あと、「二重の不変資本問題」、いいかえれば、(1) 機械採用の動機と結果との関連、(2) 機械の再生産と流通、という機械と固定不変資本問題を考察している。すなわち、(1) の「動機」と「結果」のうち、相対的剰余価値率の上昇と利潤率の低下という二つの結果の関連は、新メガ版『要綱』編集者が「剰余価値と利潤」と名づけた個所 (ibid., SS. 277—309) で、「動機」は上記のマルクスのブルードン批判を含む個所 (ibid., SS. 336—345) で、それぞれ考察している。

この私の主張にたいして、シュヴァルツ氏は『要綱』の基本論理は「資本一般」である、すなわち「資本を分析するさいには、完成した諸資本相互の関係のなかで生ずるような派生的な諸規定をさしあたり捨象すべきだ、……すなわち、諸資本相互の行動のなかで貫徹されているものは何であり、このような諸資本相互の関係からは

どのような特殊な諸規定が出てくるのかという問題をとにかく明らかにすべきだ」(『資本論体系成立史』訳一六〇ページ)という『要綱』の基本的側面を力説した。

第三の論点は、いったい「直接的生産過程の諸結果」の主題はなにか、である。シュヴァルツ氏は、(1)資本関係の再生産、(2)前貸可変資本の労働への解消、(3)領有法則の転回、(4)剰余価値の追加資本への再転化、この四点此の「生産過程」の結果の主題である、と主張した。これは『資本論体系成立史』(訳二六二—二六六ページ)での主張と同じである。いいかえれば、三節からなる「諸結果」のうち、第二節の資本蓄積論の内容こそ、その主題である、と氏は考えているのである。

これにたいして私はつぎのようにのべた。すなわち、氏の見方には、『資本論』の第三次草稿(一八六三—六五年)のうち、「第一部 資本の生産過程」の資本蓄積論は「諸結果」のみで展開されているという前提があるのではない。しかし『一八六三—六五年草稿』の「諸結果」や「第二部 資本の流通過程」(第一章稿)における第一部への言及個所をていねいに見れば、第一部の構成は「第一章 貨幣の資本への転化」・「第二章 絶対的剰余価値」・「第三章 相対的剰余価値」・「第四章 絶対的剰余価値と相対的剰余価値との結合」・「第五章 剰余価値の追加資本への転化」であったことが判明する。つまり「第六章 直接的生産過程の諸結果」のまえの第五章ですでに資本蓄積論は展開されていたのである。日本の『資本論』形成史研究の先駆者の一人・佐藤金三郎氏はアムステルダム社会史国際研究所が所蔵する第三部の「主要原稿」(一八六四—六五年)の調査などで、第一部の構成をこのように推定している。私もその調査などをもとに第一部の構成が上記のようであったと推定し、さらに佐藤氏がシュヴァルツ氏と同じように、蓄積論は「諸結果」ではじめて展開されたと考えていた点を、すでに第五章で展開されていると批判したことがある(拙稿「直接的生産過程の諸結果」『マルクス・コンメンタール』(V)『現代

の理論社、一九七三年、および『資本論』成立史における『直接的生産過程の諸結果』『専修経済学論集』、一九七六年二月、参照。

第四の論点は、「直接的生産過程の諸結果」はなぜ放棄されたのか、その理由である。この点について、私は、マルクスが『資本論』の第一巻(Band)を準備していた一八六六年秋、最初は第一巻に「第一部(Buch)資本の生産過程」および「第二部 資本の流通過程」を収める予定だったが、第二部の理論内容がなお確定しなかったこと(それは第一部の蓄積論と第二部の再生産論との関連の問題と深く結びついている)、それに第一部の枚数が予定より膨大になったという技術的な事情が、その放棄の原因ではないか、と述べた。

これにたいして、シュヴァルツ氏は私の判断は「外面的な動機として」了解できる、と認めつつも、「本質的な動機として」、「成立史」での主張、すなわち『諸結果』の第三の部分(第三節 資本の生産物としての商品)の放棄は、根本的には、一見してそう思われるほど重要な意味をもっていない。むしろこの放棄は、マルクスの研究の進め方のなかに根拠があり、一般的に言えば、研究過程が最終的な叙述よりも前に完了することはけっしてなかったということによって説明がつく。」(訳二八ページ)を繰り返し述べた。しかし氏の主張は「諸結果」を研究過程と見ている点、おもしろいが、問題がある。すなわち、それは「資本の生産物としての商品」という項目は、そもそも第三の経済学草稿(一八六三—六五年)ではじめて着手されたものだ(訳二八ページ)と氏が考えている点である。「諸結果」の第三節のテーマは『要綱』で展開されている。なかでも、資本の構成($C + V + M$)は、機械採用による労働生産性の上昇率が a 倍になれば、 $C + V/a + M + (V - V/a)$ に変化するとの指摘(ただし式は筆者)は重要である。その点、シュヴァルツ氏が、不変資本、特に機械採用は剰余価値率とは無関係である、と考えている点には同意できない。このように反論すると、氏は私に賛成した。ただし、『要綱』

における、かのブルードン批判を含む「第二の生産過程の結果」（三一三ページ参照）が「第六章 直接的生産過程の諸結果」の「第三節 資本の生産物としての商品」に再現しているとの私の主張には同意するものの、もう一つの『要綱』「第一の生産過程の結果」（同ページ参照）は「諸結果」の第三節には再現していない、なぜなら『要綱』のそこには剰余価値とともに利潤というタームがあるが、「諸結果」の第三節には剰余価値の利潤との関連はと反論した。私はその重要な反論を承認して、第一部の最終章である「諸結果」では剰余価値の利潤との関連は捨象し、その関連は「第三部 総過程の姿容」（第三部の主要原稿）の初めで論じられているのではないかと述べた。すると、シュヴァルツ氏は、わが意を得たりとの笑みを浮かべて、モスクワのIMLでノートした「主要原稿」の初めの部分を開いて読み返した。しかし時間がなく急いで書いたため、解読できない箇所があり、この点の確認は断念した。

「諸結果」と第三部との関連でもう一言及すべき点がある。シュヴァルツ氏は『成立史』（一九七八年）で「〔諸結果〕第三節で」マルクスは、商品価値の生産価格への転化のことをほのめかしている」（訳二七三ページ）と述べて、論拠は別だが廣松渉氏と同様の指摘『資本論を物象化論を視軸にして読む』一九八六年、三五二、三五四、三五九ページ）を行なっている。

討論は午後一時より五時三〇分まで続いた。そのあとシアヴァルツ氏の私宅に招かれ、夕飯をごちそうになり、その夜は泊めていただいた。翌日九月九日の午前中、約束どおりマツォーネ氏を私宅に訪ね、「マルクスとヘーゲルの関係」について意見交換を行なった。氏は『イデオロギー理論の問題（I）』（リブラ、一九八一年）という著書がある。

氏には私の英文ペーパー、'The Money of the Spirit; the Young Marx's Analysis of the Homology between Political Economy and Hegel's Philosophy'『専修大学社会科学研究所月報』No.27(1986・3・20)を前日に渡してあった。

マツォーネ氏は前日のシュヴァルツ氏との討論について私に尋ね、さらに東ベルリンのIMLでの予定(J・ユングニッケル氏などの『一八六一—一六三年草稿』における機械論草稿の執筆順序をめぐる討論——後述)について興味深げに聞いた。

マツォーネ氏はまず、歴史の次元には宇宙的次元、生態学的次元、社会的次元、精神的次元があり、それらを区別すべきである、その点、日本の芝田進午氏の仕事から学ぶことが多かった、と述べ、さらに『資本論』協業論とヘーゲルの『論理学』の目的論における「目的定立(Zwecksetzung)」とが深く関連するとか、私が少し『要綱』を研究しているとの発言にからめて、ニコラウスの英訳の『グルントリッセ(要綱)』はあまり良くないと批評した。

私のペーパーについては、第一に、内田は、『経済学・哲学草稿』という「自己」とは商品交換の関係の主観化、すなわち「価値(value)」である。(三ページ)と書いているが、ここでの価値とはリカードウ価値論にもとづくものか、いったい価値形態論が未成立の初期マルクスについて価値というタームを用いて議論できるのか、と鋭い質問を浴びせてきた。

それについて、おっしゃるように初期のマルクスではまだ価値形態論は未成立である。しかし論文でも言及しておいたように、初期マルクスは貨幣を「価値の実存する積極的な概念」と規定し、ヘーゲルの『論理学』を「精神の貨幣、すなわち人間と自然との思弁的価値、すなわち思想価値」と見ている。いったいこのようなマル

クスの言明をどう理解したらよいか。近代人が取りむすぶ社会関係はすぐれてイデアールな関係に純化する特質をもち、その関係が金という自然実体に体化している事態にマルクスは注目しているのではないか。『経・哲草稿』以前の、彼の学位論文、古代ギリシャの自然哲学の研究ですら哲学史の通説的視角から読むべきではなく、むしろそれは実は近代人の関係の特質分析ではないのか。

しかも彼はヘーゲルの『論理学』こそ、そのような事態を抽象態で描写していると洞察しているのではないか。注目すべきことに、マルクスは『経哲草稿』の貨幣論で、『論理学』存在論の「質↓量↓度量↓限度のないもの」という論理を貨幣の諸規定の基準にしている。のちの『要綱』貨幣章では、『論理学』質論における「或るものと〔或る〕他のもの」・「一者と多者」を基準にして価値形態を展開してゆく。そこに『経哲草稿』から『要綱』へ、『論理学』の摂取が継続して行なわれていることが示されていると考える。

このようにのとると、マッソーネ氏は、私が『要綱』における『論理学』の継承について若干の見解をもっていると見て、『要綱』と『論理学』との関連について質した。私が拙著『中期マルクスの経済学批判』の「第三章『経済学批判要綱』とヘーゲル『論理学』」の大意を述べると、大変興味を示し、そのアウトラインを英訳して、氏に送るように、要請された。

二 ドイツ民主共和国ベルリンの「マルクス・レーニン主義研究所」(Institut für Marxismus—Leninismus) における討論

九月一六日午前九時、IMLに着く。R・ニーツォルト教授が堂々たる建物の本館の玄関で笑顔で出迎えてくれた。ニーツォルト教授と私の討論相手、J・ユングニッケル氏は近くの別館に研究室がある。さっそくユング

ニッケル氏の研究室に行く。そこには秀麗なユングニッケル氏のほかに、新メガの第一部第一二巻（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』）の編集者である、美しいローゼマリー・ミューラー女史が待っていた。自己紹介のあと、討論に入った。ミューラー女史はニーツォルト教授およびユングニッケル氏と私との間をドイツ語と英語で通訳してくれた。討論は主にユングニッケル氏との間で行なわれた。IMLの副所長、ハインリヒ・ゲムコウ教授との懇談と昼食の時間を除き、午前九時三〇分から午後五時三〇分まで、約五時間三〇分続いた。

私は離日以前に、シュヴァルツ氏に送った英文レジュメと同じものをユングニッケル氏にも送っておいた。ただ以下の討論では、私は拙稿「二重の不変資本問題」の理論射程」（『専修経済学論集』一九八六年九月）もふまえて発言した。

討論のテーマは、新メガでその全容が明らかになった『一八六一一六三年草稿』という『資本論』第二次草稿のなかの、機械論草稿がいかなる順序で執筆されたか、である。ユングニッケル氏と私は、その草稿が「中断」して書かれたと推定する点で意見を共有している。その点、私より前にこのIMLを研究訪問した吉田文和氏の「連統執筆説」と対立する（吉田文和「新MEGA編集者をたずねて」『経済』一九八五年一〇月参照）。

まずユングニッケル氏と私が「中断説」をとる点で一致していることを確認した。問題点をやや詳細に見るために、『一八六一一六三年草稿』のうち関連する項目をあげ、それらの推定執筆順序を示せば、「中断説」は、「機械論（前半）」↓「剰余価値に関する諸学説」（以下、「学説史」と略）↓「機械論（後半）」と推定する。これにたいてして吉田氏の「連統説」は、「分業論（末尾）」↓「学説史」↓「機械論（全体）」と推定する。

論点の第一は、ユングニッケル氏が出した。氏は、「第三章 資本と利潤」が書かれた『最終ノート』がいつ執筆されたのか、書誌的に推定すべきではないか、といった。

実は、当初、新メガの編者は、「第三章 資本と利潤」を「学説史」の「後に」書かれたと推定し、そのように編集したが、いまでは大村泉氏の、「第三章 資本と利潤」は「学説史」の「前に」書かれたという反証（生産価格と『資本論』第三部の基本論理（上・中・完）『経済』一九八三年三・四・五月）を事実上受け入れている。ユングニッケル氏もその立場に立つ。問題は、では「第三章 資本と利潤」はいつ執筆されたかである。ユングニッケル氏はその推定を書誌的に行なおうというのである。それにたいして私は、いったいそのような書誌的事実はあるのか、私も色々検討してみたが、発見できない。あれば教えてほしい、と乞うた。しかしユングニッケル氏は確たる事実を示せなかった。

そこで私は、そのような書誌的証拠が挙がらないかぎり、それにかわって理論的推定を行なわざるをえないと述べた。私は「二重の不変資本問題」こそ、『一八六一—六三年草稿』で、「学説史」の前に相対的剰余価値論とあい前後して利潤論（第三章 資本と利潤）を書いた理論的モチーフであると考える。「二重の不変資本問題」とは、(1)機械Ⅱ固定不変資本の採用の「動機」と「結果」、(2)機械の再生産Ⅱ流通、この問題である。マルクスは、すでに『要綱』で、相対的剰余価値の概念および労働の二重作用を把握したあと、この問題に取り組んでいる。すなわち、新メガ編集者が「剰余価値と利潤」という標題をつけた個所で、「相対的剰余価値率の上昇および一般利潤率の低下」という機械採用の二つの結果の関連の考察を行ない、つぎに三つのうち最初の「資本の実現過程」(MEGA, II/1, SS. 315—336)をほさみ、マルクスのブルードン批判を含む個所 (ibid., SS. 336—345)で、「価格・生産費・利潤」の用語で「機械採用の動機」、すなわち事実上、諸資本間の「特別利潤」をめぐる競争を把握している。そのあと、二番目の「資本の実現過程」(ibid., S. 345)↓「一般的利潤率の形成」(ibid., SS. 345—350)について、「資本と収入との交換」・「資本と資本との交換」を通した「資本の再生産過程」(ibid., SS. 350—357)

が考察されている。なるほどこの考察は再生産表式を把握するまでにいたってはいない。しかし『資本論』形成史研究上必要なのは、そのような不十分さを指摘して自足することではない。むしろ注目すべきは、相対的剰余価値の概念の把握↓(価値・不変資本と可変資本・剰余価値次元の)剰余価値と利潤との関連の考察(これは『資本論』第三次草稿「第一部 資本の生産過程」第六章 直接的生産過程の諸結果」「第三節 資本の生産物としての商品」の初めの「単純商品と商品資本との比較」の次にあるので、「第一の生産過程の結果論」と命名)↓(価格・生産費・利潤次元の)特別利潤の把握(同じ理由で「第二の生産過程の結果」と命名)↓再生産Ⅱ流通の展開という順序が『要綱』資本章の「I・資本の一般性」に貫かれていることだ。この順序を規定しているのが「二重の不変資本問題」である。

しかも英文レジュメで示したように、『要綱』を再編成した「一八五九年プラン草案」では、「Ⅲ・資本と利潤」の冒頭に「第一の生産過程の結果」が「利潤率と剰余価値」という標題で移され、そのあと「資本と利潤」という標題のもとに、『要綱』Ⅲ、資本の個別性」における、生産費↓一般的利潤率の低下↓(その原因分析としての)協業・分業・機械の考察が続く。一方「三、相対的剰余価値」の直後に「第二の生産過程の結果」が「商品の価格。ブルードン」という標題でおかれる。こうして「プラン草案」には、相対的剰余価値の概念↓「第一の生産過程の結果」「利潤率と剰余価値」↓生産費↓一般的利潤率の低下↓協業・分業・機械「利潤論と相対的剰余価値論における共通項」↓「第二の生産過程の結果」「商品の価格。ブルードン」という順序が浮かび上がってくる。この順序こそが『一八六一―六三年草稿』で再現するのである。『一八六一―六三年草稿』で、相対的剰余価値論とあい前後して利潤論が執筆されたという事実是否定しがたい。とすれば、その執筆の理論的根拠はなにか。私は、『要綱』「I・資本の一般性」における上記の「二重の不変資本問題」に規定された順序が『一八六一―六三年草稿』の当該個所に再現した、と考える。以上が書誌的立証にかわる、私の理論的推定である。どうであらうか。

こう述べる、ユングニッケル氏は俄かに同意せず、(これが第三の論点になったのだが)、『要綱』における機械問題、すなわち固定不變資本問題は利潤論 (Hett VII, SS. 39—43; MEGA, II/1, SS. 683—697) で行なわれたのではないか、と主張した。

私はなるほど、ご指摘の個所でも機械問題は研究されたが、相対的剰余価値の概念はリカードウの機械論の批判的分析を通して導かれたし、その関連でそのすぐあと「第一の生産過程の結果」で「剰余価値と利潤との関連」が考察された。『要綱』「II. 資本の特殊性」の「固定資本の発展」の個所でも機械問題は「自由時間論」と結合して考察されたのではないかと補足し、当該個所を指し示した。

第四の論点として、ユングニッケル氏は、内田は『要綱』における特別利潤論を云々したが、『要綱』でそれは考察されていない。資本一般という『要綱』の主体は特別利潤をめぐる諸資本間の競争と相容れない、と私を批判した。

私は、なるほど、『要綱』の主体概念は資本一般＝「一つの資本」である。しかし『要綱』にはコロラリーとして諸資本の競争は取り上げられている。「第二の生産過程の結果」の所のほかに、例えば新メガで四八九ページを参照されたい。五六九ページに「超過利潤 (Surplusprofit)」という用語が書かれていると反論した。

この私の反論にたいしてユングニッケル氏は、『要綱』の「一つの資本」は競争を捨象して措定されている、と主張した。私は、無論そうであるが、その『要綱』の主体概念を確認するだけでなく、それから捨象された問題、特に諸資本の競争が論じられている事実にも注目したい、と述べ、さらに、『要綱』を執筆しているときに立てた「経済学体系批判のプラン」で見れば、その「第一編 資本」のうち、「(a) 資本一般」が『要綱』の理論範囲である。しかし『要綱』ではそれに続く「(b) 諸資本の競争」に関しても論及しているのである。したがって

『要綱』のマルクスは「資本一般」一つの資本」を主体概念としつつも、多くの諸資本間の競争が内包する問題をも視野に入れていたのであって、けっして「資本一般」一つの資本」の中に「諸資本の競争」の属する問題、例えば「特別利潤」の問題を無理に包摂しようとして「アボリア」難点」を抱え込むという矛盾に陥ったなどと考へてはならないのではないかと付け加えた。

論点五はユングニッケル氏が出した。氏は、『一八六一—六三年草稿』における機械論（前半）から「学説史」への移行の理論的モチーフはなんであろうか、と問うた。氏はさらに自ら答えて、マルクスのブルードン批判の直前のパラグラフ、「（機械採用は労働者数の減少以外の）なにか独特のことがつけ加わるのか」との問題から「学説史」に移行したと推定する、と述べた。氏は私と同じ「中断説」を主張しているが、肝心の「中断箇所」の推定で私と違うのである。

私は、氏の推定はすでにロシア語訳『要綱』編集者の見解として表明されている。氏はその推定を継承していると考えられるが、それならなぜ「学説史」の冒頭から、いわば「機械の学説史」というかたちで、その問題が解明されていないのか。むしろ実際はまず「剰余価値の源泉把握の理論史」が、ステュアート→重農学派→スミスという順序で、執筆されている。さらに、氏の推定によれば、機械論の「後半」はフォルカードのブルードン批判が内包している「不変資本の再生産問題」の分析に機械論の「後半」の最初が直続することになるが、その理由はなんであろうかと質したが、明確な答えはなかった。

そこで私は、その分析から「学説史」に移行したと推定するのがもっとも自然ではないかと述べた。すなわち、フォルカードのブルードン批判に論及している個所でマルクス自身「不変資本の価値についていえば、この価値は、それ自身によって、現物で補填されるか、または不変資本の他の諸形態との交換によって補填されるか

するのである。」(MEGA, II/1, S. 318)と書いているように、マルクスはその批判に不変資本を含む「資本の再生産」流通の問題」を読み破っているのである。この問題は、いったい剰余価値の源泉は流通過程か生産過程かを問うテーマと関連するところの「商品資本の貨幣資本への転化過程 ($W \rightarrow G$)」で説明される。なぜなら、「商品資本の貨幣資本への転化過程」はそのあい対する過程として「貨幣資本の生産資本への転化過程 ($G \rightarrow W$) ($A + Pm$)」を前提するからである、と述べた。続けて、そもそも「商品の価格。ブルードン」という標題でマルクスは「資本の生産物としての商品」、すなわち商品資本を資本の生産過程の結果として「価値構成・剰余価値率・利潤率・個々の商品と総商品との比較」などを分析し、商品資本が流通過程で貨幣資本に転化する諸条件を明らかにし、したがってその転化過程にあい対する貨幣資本の生産資本への転化条件も説明する予定であった。

このように商品資本の分析は流通＝再生産の諸条件を説明する準備作業なのではないか。しかもこのような問題意識はすでに『要綱』「I. 資本の一般性」で示されているし、さらに第三部の「価値の生産価格への転化」にも関連しているのではないか、と述べた。

第六の論点もユングニッケル氏が提起した。氏は、私が「学説史」における再生産＝流通の問題に言及したのを受けて、資本蓄積論は「学説史」で「部門分割・表式」($C \rightarrow II(V + M)$)「部門の順序は『資本論』と逆」などをもって初めて論証された、と「学説史」の重要性を力説した。

私は、なるほどそのとおりである、と同意した。そのうえで、しかし『資本論』形成史研究という視点からは「学説史」におけるその論証の準備過程として、それ以前にも目を配りたい。初期マルクスがすでにケネーの「経済表」を読んでいるし、『要綱』ではそれを前提にしてと推定されるが、「資本章プラン」に「諸資本の流通」を「資本と資本との交換」・「資本と収入との交換」を媒介にして説明するプランが書かれているなどの点に注目

したい、と付け加えた。

論点七は私から出した。拙稿「『二重の不変資本問題』の理論射程」をふまえ、吉田文和氏の機械論草稿「連統執筆説」を批判した。第一に、『一八六一—六三年草稿』の執筆に使用された用紙は一〇種類あり、同じ用紙は「連続して・同じ時期に」使用されたという特徴がある。ところが吉田氏の「連続説」は、この特徴に反し、(ノートⅢ・一二四ページに充てられた)わずか二ボーゲンの用紙が九〇—一〇ヶ月ないし六〇—七ヶ月もあとにたまたま残っていたという危うい偶然性を前提にして辛うじて成り立つ。さらに『テヒノロギー史抜粋ノート(二三ページ)』・『一八六一—六三年草稿(ノートⅤ・一九二ページ)』・『一八六一—六三年草稿(ノートⅩⅩ・一二六ページ)』の三つを詳細に比較すれば、一八六三年一月二八日のマルクスのエンゲルス宛の手紙が『一八六一—六三年草稿』のノートⅤ・一九二ページでのボッペへの言及には時期的にけっして結びつかず、吉田氏の「連続説」が到底成立しないことが判明する。さらに『要綱』を再編成して作成された「一八五九年プラン草案」には先に説明したように、相対的剰余価値の概念↓利潤率と剰余価値↓生産費↓一般的利潤率の低下↓協業・分業・機械↓商品の価格↓ブルードン批判という順序が示されている。その順序が『一八六一—六三年草稿』に再現したと推定される。したがって「中断説」は十分に成立する。このように書誌的にも理論的にも「中断説」が自然で「連続説」は非常に不自然である。不自然な推定は探ることはできない。このように拙稿の要旨を紹介した。

するとユングニッケル氏は、それらは新しい論点であり、全く賛成である、と同意した。

最後の第八点は私が提起した。すなわち、拙稿「『二重の不変資本問題』の理論射程」から引用して、

『『資本論』(初版)』での、(a)価値実体論↓(b)価値形態論↓(c)商品物神性論↓(d)交換過程論↓(e)商品流通↓貨幣論という価値論レベルの新しい順序は、『一八六一—六三年草稿』機械論「前半」以降における、(a)価値

増殖過程論→剰余価値論→(b)蓄積論→(c)原蓄論→(生産過程の結果論→循環論→回転論→)(d)流通→再生産論→
(e)貨幣還流論という新しい構成を反映している。(たとえば、上記の(a)は(a)に対応している。——引用者追補)こ
のように『一八六一—六三年草稿』でマルクスが「二重の不変資本問題」を解くために、諸資本の間の「競
争」に連動して導入した「分業→部門分割」の契機は資本論レベルの構成を再編しただけでなく、より抽象
的な価値論レベルの構成をも変えたのである。」

と述べる、ユングニッケル氏は、傍らにある『マルクス・エンゲルス全集(Werke)』のうち、書簡集の一冊を
取り出した。開いたのはマルクスのエンゲルス宛の一八六七年六月二二日の手紙である。ユングニッケル氏は、
つぎの文を読み上げた。

「経済学者諸君はこれまでつぎのような、きわめて簡単なことを見落としてきた。すなわち、二〇エレのリ
ンネル→一枚の上着という形態はただ二〇エレのリンネル→二ポンド・スターリングという形態の未発展な
基礎でしかないということ、したがって、商品の価値をまだ他のすべての商品にたいする関係としては表わ
してはいないで、ただその商品自身の現象形態とは違うものとして表わしているだけの、最も簡単な商品形
態が、貨幣形態の全秘密を含んでおり、したがってまた、労働生産物のすべてのブルジョア的な形態を縮約
して含んでいる、ということがそれだ。僕は最初の叙述(ドゥンカー『経済学批判』のこと——引用者)で
は、価値表現の本来の分析を、それが発展して貨幣表現として現われてからはじめて与えるということによ
って、展開の困難を避けたのだ。」

ユングニッケル氏は、『経済学批判』では価値形態論は展開されていない。したがって内田が『経済学批判』
ですでに価値形態論を展開したと見なして、そこで未分化であった価値形態論と交換過程論が『資本論(初版)』

では分化したというのは正確ではない、と批判した。

私は答えて、なるほど『経済学批判』には「交換過程」という用語はあるが、「価値形態」という用語はまだない、とまず確認した。しかし『経済学批判』には「ある一商品の交換価値（正しくは価値——引用者）は、他の諸商品の使用価値で自己を表わす。」（Weber, Bd. 13, S. 26）という文で示されているように、事実上、価値形態は把握されている。この把握はすでに『要綱』「貨幣に関する章」で行なわれている。『資本論』形成史研究の意義の一つは、このような概念の「事実上の成立」が「用語の成立」に先行しているかどうかをはっきりさせることにある。「労働の二重作用」・「特別利潤＝特別剰余価値」についてもこのズレがある、と反論した。

最後にユングニッケル氏は討論を総括して、われわれは本日論じた問題では基本的な相違はない。内田論文（『二重の不変資本問題』の理論射程）は大変興味深いので、英訳してモスクワとベルリンのIMLに送ってほしい、と依頼した。私はのちに、イギリスのプリストル大学・政治学部に滞在しているとき、拙稿を

The Discontinuity Writing Order of the Machinery Manuscripts of Critique of Political Economy (Manuscripts 1661—63) として訳し（B 4で二ページ）、そのコピーを両研究所に送付した。

〔参考資料〕

マルクスの『資本論』形成史における「二重の不変資本問題」

(1) 『経済学批判要綱』において、カール・マルクスは「二重の不変資本問題」に遭遇した。不変資本は機械および原料などへの投資される資本からなり、前者〔機械投資〕に後者〔原料投資〕が随伴する。

この問題の一つの側面は機械投資と原料投資、特に機械投資の動機と結果とを区別し、かつ関連させることである。第二の側面はその投資の社会的条件を分析することである。機械を導入するさいの個々の資本家の動機は他の資本にたいする労働生産性の優位の成果として特別利潤を獲得することである。しかもその社会的結果として彼らは相対的剰余価値率の上昇と一般的利潤の低下を、意図しなくてもたらす。特別利潤をめぐる資本家間の競争こそ機械導入の動機であり、相対的剰余価値率の上昇と一般的利潤率の低下が彼らに等しくもたらされる社会的結果である。

『要綱』では、しかし、マルクスは資本の一般的本性を展開するために、「一つの資本」を前提し、資本主義的競争を基本的には捨象する。この前提は資本家が競争して行なう機械投資の「動機と結果」を研究する仕事と矛盾する。もし「一つの資本」が、マルクスが『要綱』でスミスに従ったように、ただ消費手段を生産すると前提するならば、それは生産手段、特に機械をいかにして調達できるのか。「一つの資本」という前提と、「多くの資本の間の競争」を導入する必要との間の矛盾にもかかわらず、マルクスは、「相対的剰余価値の概念」(MEGA, II/1.1, S.248—260)と「生きた労働の二重作用」(ibid., S.266—277)を展開したあとで、「二重の不変資本問題」を考察した。

機械導入の動機（特別利潤）と二つの結果（相対的剰余価値率の上昇と一般的利潤率の低下）という第一の問題はつぎのような二つの段階で分析された。

(i) 「一つの資本」と「価値規定・不変資本と可変資本・剰余価値」という条件のもとでの機械投資の「二つの結果」の関係の分析 (ibid., S.277—309)。

(ii) 「多くの資本の間の競争」と「価格・生産費・利潤」という『要綱』における例外的な条件のもとでの機

械投資の「動機」の研究 (ibid., S. 336—345)。

マルクスはこの二つの側面を『要綱』の上記の別々の個所で考察した。この二つの側面の研究は、『一八六三六五年草稿』「第一部 資本の生産過程」「第六章 直接的生産過程の諸結果」「第三節 資本の生産物としての商品」の主要部分のオリジナルな形態である。その名にちなみ、「二つの結果の關係」を考察した最初の部分を「第一の生産過程の結果論」といい、動機を研究した第二の部分を「第二の生産過程の結果論」と呼ぶ。

さて、マルクスはつぎに「二重の不変資本問題」の第二の側面、すなわち、不変資本がいかに再生産されるかとの問題を取り上げる (ibid., S. 350—357)。

上記の考察を含めて、『要綱』資本章「I. 資本の一般性」は次のように分析できる。「二重の不変資本問題」は次の7・9・12で考察されている。

1. 貨幣の資本への移行 (S. 173—188)
2. 資本と労働との交換 (S. 188—217)
3. 労働過程 (S. 218—229)
4. 価値増殖過程 (S. 229—248)
5. 相対的剰余価値の概念 (S. 248—266)
6. 生きた労働の二重作用 (S. 266—277)
7. 第一の生産過程の結果 (剰余価値と利潤) (S. 277—309)
8. 資本の実現過程 (1) (S. 315—336)

9. 第二の生産過程の結果 (S. 336—345)
10. 資本の実現過程(2) (S. 345)
11. 多くの資本間の競争による一般的利潤率の形成 (S. 345—350)
12. 「資本と収入との交換」と「資本と資本との交換」を通じた資本の再生産過程 (S. 350—357)
13. 資本の実現過程(3) (S. 357—359)
14. 剰余生産物・剰余資本 (S. 360—365)
15. 領有法則の転回 (S. 365—367)
16. 資本関係の再生産 (S. 367)
17. 本源的共同体と本源的蓄積 (S. 367—451)

(2) マルクスは、一八五九年に『経済学批判』を出版したあと、『要綱』を再編して「一八五九年の資本章プラン草案」を作成する。そこで彼は、「第二の生産過程の結果」に「商品の価格。プルドン」というタイトルをつけて、「三、相対的剰余価値」の直後におく。

「第一の生産過程の結果」は「利潤率と剰余価値」というタイトルをつけ、「Ⅲ・資本と利潤」の最初に移した。

「資本の実現過程(1)(3)」は「Ⅱ・資本の流通過程」の冒頭に移された。しかし、それは、のちに『一八六一—六三年草稿』『学説史』における社会的再生産の諸条件の分析をふまえて、『一八六三—六五年草稿』『第二部資本流通過程』では「第三章 流通と再生産」に再生産過程の契機として移される。

(3) 『要綱』の「プラン草案」へのこのような再編にもかかわらず、マルクスは『一八六一—六三年草稿』を執筆中、「二重の不変資本問題」を再び研究することが必要だと考える。正確にいえば、「相対的剰余価値の概念」の草稿を書いているとき、「二重の不変資本問題」の第一の側面、すなわち機械投資の動機と結果とはいかに関連するかとの問題がふたたび彼をとらえた。

個々の資本家は特別利潤を獲得しようという意図をもって機械を採用し、無意識に一般的利潤率を低下させる。方法的にいえば、マルクスはいまや、読者が個々の利潤率の一時的な上昇と一般的利潤率の低下とが発生するのを合理的に理解するための例証として、資本一般の展開過程に多くの資本の競争を導入する必要に直面する。マルクスはこの問題を自覚しはじめた。

「いっさいの困難は、労働の生産性を高めるさいに個々の資本家が直接に考えているのは必要労働時間を引き下げることでなくて、労働時間をその価値以上に高めること——だ、ということから生じる。」(MEGA, II/3, 1, S. 217—218)

マルクスは「相対的剰余価値の概念」を書き終わったとき、「次のページから述べるような理由で」利潤論に移った。それが「最後のノート」に書かれた「第三章 資本と利潤」である。しかし彼はなお競争と多くの資本の契機を導入するのをさしひかえた。

「ここでもまたわれわれは、多数の諸資本間の競争に立ち入ることなしに、一般的法則をこれまでに展開された資本の一般的性質に立脚しているのである。」(ibid., II/3, 5, S. 1632)

しかし、価値規定と一つの資本という条件のもとで資本の一般的本性を展開するというテーマは、もう一つの

テーマ、すなわち、相対的剰余価値率の上昇と一般的利潤率の低下とが、個々の資本家の動機（作用原因）を通じて社会的結果（目的原因）としてもたらされるわけを読者が理解するための例証として、部分的に多くの資本家の間の競争を導入し、機械投資の動機と結果との関連を証明するというテーマと、矛盾する。

マルクスは「第三章 資本と利潤」のあと「a)協業」にもどり、つづけて「b)分業」↓「r)機械」という順序で執筆したと推定される。なぜか。その理由は「一八五九年プラン草案」で確かめられる。すなわち、マルクスは『要綱』を「プラン草案」の「Ⅲ、資本と利潤」でつぎのように再編している。

1. 利潤率と剰余価値
2. 資本と利潤
3. 生産力の増大にともなう、同じ労働量を充用するための資本の増大
4. 危険。利子。生産費。
5. 資本のすべての部分の均等な利潤
6. 賃金と利潤とは、生産形態であり、したがってまた分配形態である、等々。
7. 利子と利潤

すでに述べたように、マルクスは『一八六一—六三年草稿』で「相対的剰余価値の概念」から、上記の「一八五九年プラン草案」でみれば、「Ⅲ・資本と利潤」の冒頭の「(1)利潤と剰余価値」（第一の生産過程の結果）に移ったことになる。この順序は、「生きた労働の二重作用」を価値増殖過程論にうつしたので、『要綱』における順序の再現である。しかも続く「(2)資本と利潤」ではもともと『要綱』で、

a) 資本と利潤

- b) 生産費
- c) 利潤率の低下
- d) 協議
- e) 分業
- f) 機械

という内容がこの順序で書かれていた。重要なのは上記の、「d)協業」・「e)分業」・「f)機械」が「c)利潤率の低下」の原因分析であるということである。このような関連が『一八六一—六三年草稿』の「第三章 資本と利潤」と「3、相対的剰余価値」で再現したのである。すなわち、「相対的剰余価値の概念」↓「第三章 資本と利潤」における「剰余価値と利潤」↓「生産費」↓「一般的利潤率の低下」と書かれ、続く「a)協業」↓「b)分業」↓「f)機械」という内容と順序は利潤論と相対的剰余価値論で重複し、それらは相対的剰余価値論で書かれたと推定される。

上記の二つのテーマの間の矛盾にもかかわらず、マルクスはつぎにみるように「b)分業」の終わりまで、「資本一般」の展開から多くの諸資本間の競争を捨象し続ける。

「ここでは、競争を引きあいに出すことはいっさい避けなければならない。というのは、それは諸資本相互の行動であり、したがってすでに資本一般の展開を前提するものだからである。」(ibid., II/3. 1, S. 286)

しかし、この問題は「f)機械」で、他の資本にたいして労働生産性の優位の成果として特別利潤を獲得しようと互いに競っている複数の資本を導入することによって、解決される。

「(労働生産性の増大による)必要労働時間のこうした短縮は一つの結果であるが、資本主義的生産全体の利益

になり、また、労働能力一般の生産費を減少させるものである。……けれどもこれは、個々の資本家にとっては少しも機械を採用する動機ではない (kein Motiv)。それは一般的な結果 (ein allgemeines Resultat) なのであって、個々の資本家はこれによってとくに利益を得るわけではないのである。」(ibid., S. 301-302)

読者が理解しやすいように例証として多くの諸資本間の競争を導入したことは、「資本一般」そのものの破棄を意味しない。むしろその変容 (Modification) である。しかし、この変容は「資本蓄積」の展開にも適応されることになる。「一八五九年プラン草案」でマルクスは、資本蓄積を「多くの諸資本間の競争」で展開する予定であったが、いまではその主題を「諸資本の競争」から「資本一般」に移したのである。

すなわち、彼は「資本一般」でいかに機械が社会的に再生産されるかを分析することが必要である、と考える。賃労働者は彼らの生活ファンドを買い戻すことができないと誤って主張するブルードンを批判する予定を示す、「プラン草案」における「商品の価格。ブルードン」を想起しつつ、マルクスはフォルカードのブルードン批判に「不変資本の社会的再生産の問題」を洞察する。

「フォルカードの」みそは次のこと、すなわち、総生産物のうち賃銀として支払われる分量 (v) は原料、等々の価値に起因する価値 (c) を少しも含んではないのに、各個の商品はそれ自体として考察するならば、つけ加えられた最後の労働に起因する価値 (m+x) と、この労働には無関係な原料、等々の価値に起因する価値 (c) とから成っている、ということである。同じことは、生産物のうち剰余価値 (利潤、等々) に分散する部分全体についてもあてはまる。不変資本の価値について言えば、この価値は、それ自身によって、現物で補填されるか、または不変資本の他の諸形態との交換によって補填される (c, = v, + x,) かである。」

(ibid., S. 317-318. () 内は引用者補足)

マルクスはフォルカード分析という形式で、いかに社会的再生産が展開されるか、特に生産手段（機械と原料など）がいかに再生産されるかを問うているのである。これこそ、マルクスが「f) 機械（前半。ノートV二二ページ）」から「学説史」に移行していった直接のモチーフである。かくして、『要綱』における「二重の不変資本問題」は再び『一八六一一六三年草稿』で問題となったのである。その問題は、『一八六一一六三年草稿』につきのような順序で研究されたと推定される。

1. 「相対的剰余価値の概念」（ノートⅢ・二五—一三一ページ、ノートⅣ・一三八—四三ページ）
2. 第三章 資本と利潤（最後のノート↓ノートXVI・九三—一〇二ページ）
3. a) 協業（ノートⅣ・一四三—一四八ページ）
4. b) 分業（ノートⅣ・一四九—一七四ページ、ノートV・一七五—一八九ページ）
5. f) 機械。……（前半）（ノートV・一九〇—二二）
6. 剰余価値に関する諸学説（ノートVI—XVIII）
7. g) 機械。……（後半）（ノートV・二二—二二九、ノートIX・一一五—一二四ページ、ノートXX・一二四—二二八ページ）

マルクスが後にノートXVIIと名づけた「最後のノート2」は、はじめて「資本一般」に競争を導入した「5. 機械（前半）」を執筆している間に書かれたと推定する。なぜならマルクスは「雑録」の「(2) 利潤率の低下」と「(4) 利潤率の低下」でその競争の契機を導入したという事実に対応関係がある、と考えるからである。